

矛盾

2024. 1. 25

「校長先生、国語の授業をやりませんか」研修主任の先生に言われた。研究作品の表紙を飾る写真のことを考えていたそうである。ふと、校長先生の写真がいいと思いついたとのことだった。それで、授業をやりませんかとなった。

そういえば、もう何年も生徒の前で授業をしていなかった。授業をしてみたいという気持ちはある。こちらから申し出れば、やらせてもらえたとは思う。だが、大義名分がない。ただのわがまま、自己満足になってしまう。

今回は、違う。依頼されての授業である。「ああ、いいよ。やらせてもらえるの。うれしいなあ」「今、古典をやっています。『矛盾』のところですよ。一度読んでください」「了解。その後をやればいいのね。まずは教科書を準備しないと」

久しぶりに、中学1年生の国語の教科書を開いた。古典のページは、以前とさほど変わりなかった。『矛盾』もそうだった。早速、授業のことを考えた。次から次へとアイデアが浮かんできた。「まだ大丈夫かもしれない」こういった時間は楽しい。先生方の授業を見て、いつもアドバイスしているため、自然と普段から自分が言っているような授業構想になる。

授業の設計図である学習指導案は作成しないが、授業構想メモをつくることにした。どんどん浮かんできた授業アイデアを形にしていった。形にすると、こうした方がいいなど、改善作業もできる。こういったときは、形式が決まっていない方がよい。自由に授業デザインを描くことができる。生徒に実際に話す内容も「 」で書くことにした。文字にすると、もっとこうした方がいい、この言葉の方がいいなどと、吟味をすることができる。

知り合いの先生に、「今度、授業をすることになった」という話をしたら、「いつですか。行きます」ときた。「授業、あるでしょ?」「何とかします」そうであるならばと、授業構想メモを少し形を整えて、人に見せてもいい状態にした。

導入では、実際に『矛盾』にまつわる故事を実演して見せる。学習課題は、聴写させる。音読は、追い読み、交互読み、速読と、様々なバリエーションで行い、いつの間にか、本文をスラスラ読めることを目指す。「故事」「故事成語」「推敲」「蛇足」「四面楚歌」などの言葉は、知識として教える。国語辞典を使って意味を調べる。言葉は、使えるようにしなければならないことを話し、『矛盾』を使って文をつくる。ここが、メインの活動となる。Aコース、Bコース、Cコースの3つを用意し、生徒に選ばせる。この時間に、授業者は赤ペン先生となり、机間指導を行う。各コースそれぞれ数名の生徒に発表してもらおう。その後、まとめでは、『矛盾』に関わることを確認する。振り返りでは、生徒に学びの実感をもたせる。

ざっと、このような流れである。さて、実際の授業はどうなったのか。後日、報告したい。